

温暖化の促進を防ぐ

+

自然災害への対策に

||

地域住民力を向上させる私たちの提案



**生ゴミ発電を備えた集合住宅で
地域ごとの支え合いを促進する**



**一人一人が発揮する力を集めて
行政のサポートで集合住宅建設**

2011年1月

発信 「支え合う集合住宅」を創る会 遠藤 滋
白砂 巖

頒価 送料込400円

目次 1 生ゴミ発電と支え合う共同住宅を軸に地域の再創造のために

3 温暖化と支え合う集合住宅
いのちを生かしあって生きる社会に向けて

11 資金のない人が『支え合う集合住宅』を作るための方策

15 企 画 書

- 16 高齢者・障害者・多世代家族の支え合い型集合住宅
過去の日本の状況は
- 17 現代の温暖化の影響について
- 18 いま私たちに出来ること
- 20 メタンガス発酵タンクの構造案
- 21 改めて、どんな「支え合う集合住宅」を創りたいのか
- 22 集合住宅の建設資金作りのために何をしてきたか
- 23 ドイツでの試み
- 24 日本でも
- 25 支え合う集合住宅と集合住宅株式会社の運営案
「支え合う集合住宅」を創る構想に賛同していただける方へ

27 ゴミ処理の現状を知るためのマークシート
※マークシートを記入したらお知らせいただくと幸いです。

生ゴミ発電と支え合う集合住宅を軸に地域の再創造のために

戦後、私たちは個人個人の自由と幸福の追求をしてきた。個人の自由をえて、自分は自立していると思っても、都会の住民は衣食住のすべてを他人に依存して生活しています。しかし、個人の自由を手にした筈の私たちは、その隣り合わせに横たわる孤立する自由も手に入れていました。

マイホームという細分化された暮らし方のなかで、取り残される個人を生み出してきたのはいまに始まったことではありません。高度成長期には、労働力として役に立たない重度の障害者が、まず置き去りにされ、地域社会からはじき出され、その結果、支え合う心を地域住民が忘れるようになりました。

そして今度は産業の高度成長を支えて働いた人が高齢者になって、体の衰えや病気や怪我で自力での生活が困難になったことで取り残され、行政からだけでなく家族からも見捨てられる人を出す事態を生みました。それもこれもマイホームという生活様式しか選択しなかった生き方に原因があります。

大地震などの災害のときにボランティアとして活躍する姿に、「まだ日本に助け合いの心が残っている棄てたもんじゃない」と思って安心する。でも安心していいのだろうか？ 支え合いに程遠い孤独死や虐待死の発生は、自分や自分の回り人の日常の生活にひそむ孤立に原因があるのですから。

また若者が日々の生活の場で自分の居場所がない思うのも、自由と引換えの底無しの孤立を感じているからではないのか。孤立して互いに干渉しあわない人間関係のなかにいるから、自分にとって損か得かで自分だけが良ければいいという独りよがりの処し方を生み出しているのではないのでしょうか？

一方、地球の温暖化からゲリラ豪雨の災害が頻発させているとしたら、漫然と生ゴミを焼却処分するなどもっての外ということになりませんか。私たちの日々の生活のシステムが、ゲリラ豪雨などの災害の引き金の一つになって、誰かを何処かで災害に巻き込んで殺していく手助けをしているとしたら。

また、大地震などの災害に遭遇した時のことを想像してみてください。電気・ガス・水道が止まり、炊事やトイレや風呂が使えず洗濯もできなくなった時、最低でも何が心配なくできるようにしてあれば良いのか。動ける人には我慢できても、例えば赤ちゃんに必要なこととは。

いざという時に、そうした事態に対処できる集合住宅が一定の地域ごとに区内にあったら。全体からみたら僅かでも、最低限の必要を満たしてくれたら。そういう必要に応えられる能力とは。電気や水が供給できトイレが使えお湯も確保できれば、取り合えずは必要を満たすことができるのでは。

でもそんなことができるはずはないと大方の人は思うでしょう。現在の地域社会を見回しても絶対に無理だと。確かに現状のままではできません。でも、地域で集めた生ゴミと集合住宅の下水をメタン菌で発酵させ、発生したメタンガスで発電して余熱で水をお湯にすれば、そのすべてが可能になります。

つまり、生ゴミなどの発酵タンクと発電機としてガスエンジン、熱交換機としてジェネレーターを備え、雨水もためる集合住宅を、一定の地域ごとに配置して造ればそれは可能になります。こうした地域の対処能力、つまり地域力を高めることが、地域の自立度を向上させることにつながります。

でも、生ゴミの収集は誰がどうやるのと疑問を持つのは当然です。文京区の平成18年度の

データによると、区民一人が一年に棄てるゴミは、全ゴミ量267.13kgの内、生ゴミ分（植物の残滓も含む）87.46kgで、これ以外に食品を157.91kg（平成17年の農水省の食品廃棄物のデータ）を棄てている。

食品廃棄物を除くゴミの焼却で、全ゴミ当たり103.4kg、生ゴミでは27.69kgの炭酸ガスを排出している。この生ゴミの収集に文京区では、6千人当たり年間2458万円（一月204万円）がかかっている。この収集費を発電のための生ゴミ収集の人件費のするという手があります。

文京区では、6000人分の生ゴミをメタンガス発電に回すと、1トンの生ゴミで約6000円分のガスが発生し、ガスエンジンで発電すると約6000円分の電気（東京ガスの社員の示唆）になるので、年間314万8600円分の電気と温水を得て、その上、生ゴミの焼却費用961万4828円を節約できることとなります。

この発電設備を備えた集合住宅を文京区に30箇所配置すれば、生ゴミを全量処理することができます。また、焼却で排出する炭酸ガス166トンは、発電により既存の発電で排出している炭酸ガス166トンを削減したことになります。

一方、産業界が炭酸ガス1トンを減らすのに476ドル（×80円＝38,080円）かかるという試算（2009年末）がありますが、生ゴミ発電すれば166トン＝632万1280円、文京区全体では30倍の4980トン＝1億8963万8400円分の炭酸ガスを一年間に産業界に代わって減らすこととなります。

この集合住宅に、高齢者も含め介助が必要な人や、若い世代が共に住んで、住民による会社が集合住宅を管理し、子育てや介助の仕事を担うスタッフだけでなく、生ゴミを集め発電を維持する人にも地域スタッフとして住んでもらい、地域の必要に応じた事業を展開するというのはどうでしょう。

まずは支え合う暮らしを望む人が集合住宅を建設する資金の不足分を自治体が無利子で貸して、住む人が主体になって建設してはどうだろう。そして、この集合住宅の住民と周辺住民との支え合いという協力関係を育てていけば、もっといろんなことを実現することにつながるはずだ。

温暖化や化石燃料の枯渇を横目に自らの生活のシステムを変えない私たちは「いのちを生かし合って生きてる」とはいえませんが、いまこそ一人一人が自分に問うべきではないでしょうか。私たちが、これまで通りに他人を切り捨てて孤立する自由に満足して生きていく生き方を続けるのか。

それともこれからの自治体に、人が人生のあらゆる場面で共に支え合って暮らし続けられる地域作りをサポートする役割をもたせ、衣食住のすべてを他人に依存して生きている都会の生活者として、「いのちを生かし合って生きる」関係を自分たちの地域で日々創造して生きる道を模索するのか。

私たちは、これまでの生き方でよいと思っていない、ここにまとめた内容に賛同していただけの方に、2011年を共に議論し実現していく年にすることを呼びかけます。あなたもあなたのできることから始めませんか。

2011.1.1 「支え合う集合住宅」を創る会 遠藤 滋・白砂 巖

支え合う集合住宅のホームページ＝<http://www1.tcn-catv.ne.jp/sasaeai>に

「資金のない人が『支え合う集合住宅』を作るための方策」や支え合う集合住宅の建設に関する「企画書」電子版を掲載しています。

注意・本文の無断使用はお断りします。

メールは、sasaeai@tcn-catv.ne.jp へ

温暖化と支え合う集合住宅

いのちを生きしあって生きる社会に向けて 白砂 巖

私たちはこれまで、都会のあちこちで、雑草が生えたり埃がたつからと家の周りを必要以上にコンクリートで覆って、大地にしみ込む雨水を減らし、また、都市のコンクリート化によって、蓄積した太陽熱で発生する上昇気流が局地的な低気圧を生み、狭い地域に短時間に多量の雨を降らせるゲリラ豪雨の原因の一つを作ってきた。一方で私たちは、地元自治体を通して、生ゴミや雑草・植物の残滓やプラスチック類に収集費用をかけ、焼却炉の建設と維持費用を負担したうえ、収集したゴミの焼却費用を負担して、焼却熱で都市の大気温を沸騰させるために毎日あくせく生活している。

だから大気中の炭酸ガスの増加による温暖化で、ゲリラ豪雨を引き起こしているかどうかは別にしても、私たち自身が毎日の都市の大気温の上昇で飽和水蒸気量を増大させていることに加え、火力発電所や温暖化の抑止に役立つと主張する炭酸ガスを出さない原子力発電所でも、タービンを回す水蒸気を冷却するのに海水を使って、海水温の上昇に限りなく寄与し、海水の蒸発で空気中に滞留する水蒸気の増加に更なる拍車をかけている。

こうした要因が重なり合って発生するゲリラ豪雨が、表層の土砂崩れ以外に、深層崩壊による土砂崩れまで引き起こしている。これは、海外だけで起きているのではなく、規模は小さくとも日本の国内でも頻繁に発生していたことが、今年（2010年）確認され、そうした土砂崩れで一度に複数の人が命を落とす事態を各地で招いている。

そんな事態を前に、私たちは相変わらず、生活の中で廃棄する生ゴミとプラスチック類を燃やして、炭酸ガスと焼却熱を空気中に撒き散らし続けて、こうした災害を増加させるマッチポンプの役割を果たしている。この事実を前に、それは政治の問題だから自分たちが考えることではないと言い、取り合えず「ひとごと」のように、自分からは何も対策を考えようとも変更を求めて行動しようともしない人もいる。けれど、こうした人も含めて、いまの社会の仕組みの中で、ゲリラ豪雨などが引き起こす殺人に、私たち自身が加担していることに変わりはない。

だけど、膨大な労力と経費を費やして収集し焼却している都会の生ゴミや雑草や植木などの残滓を、メタン菌で発酵させ、そのガスで発電する方法に転換することで、ウランや化石燃料を使った発電以外の代替エネルギーによる発電をわずかでも増やせば、ウランや化石燃料の使用を減らせて国外へ流失する資金の一部を国内留保できるだけでなく、原子力発電で発生する放射能ゴミの発生を減らすことにも結び付けられる。

しかも、生ゴミや雑草や植物の残滓の焼却をやめて発電に活用すれば、収集費用以外の焼却にかかわる費用を減らせて、発電で得る電気と廃熱で水をお湯に変えて利用できることになる。こうしたメタンガスの発電設備を、一定の地域ごとに設置すれば、大地震などの災害に備える地域の防災に寄与できるので、こうした政策転換を私たちは国や地方自治体にも求め実現していこうとしている。

しかし、温暖化を危惧する人や原子力発電の廃棄物の処理に疑問を持つ人は、日本をどういう社会にしようというのでしょうか。この先、温暖化や原発を減らすために、ただ、個

人の節電努力や、太陽光発電の利用で自己満足して終わるのだろうか。ところが、いまだ太陽光発電はコストと発電能力の耐久性に問題があり、また、ガス会社が宣伝するガス発電にしても、発電で得る電気代とガス代はほぼ同額（多量にガスを利用する顧客だけにガス代の値下げに応じている）で、温水を作れるという利点はあるが、ガスという化石燃料を使う点では、温暖化を抑制する効果は少ない。

それに引換えメタン菌を使って生ゴミや雑草・植物残滓とトイレの排水などからメタンガスを発生させ、そのガスで発電する方式は、日本の地球上の立地条件から、メタンガスの原料は一年を通して発生・廃棄していて、ひるがえって言えば、これらの廃棄物は、メタンガスを無尽蔵に生成できる鉱脈で、これをいま、日本の社会は、焼却のための焼却で廃棄処理している。この仕組みを変えずして他に私たちがとるべき最良の道・方法があるだろうか。

ゲリラ豪雨と温暖化を減速させるために

☆都市で無駄に排出する熱源を減らす。雨水を大地にしみ込ませたり、溜めて活用。

☆ウランや化石燃料に頼る発電を減らす。太陽光はコストと耐久性に問題がある。

☆生ゴミは焼却にまわさず、生ゴミや雑草・植物残滓と利用できるトイレの排水でもメタンガス発電を行い、太陽光だけでなく小型の風力発電も活用する。

☆プラスチックは、ゴミとして焼却する場合、発電のみに使い、廃熱でお湯を沸かし活用する。

地域で災害に備えるために

☆メタンガス発電（ガスエンジンとジェネレーター）で電気と温水を確保し、災害時に地域の人が利用できる仕組み作り（＝地域の人の普段からの協力を喚起する）で、電気・水・トイレ・風呂を確保でき、焚き出しなどを担う地域ごとの拠点を作る。

これらを統合して実現する方法として

☆メタンガス発酵タンクと発電設備を備えた高齢者・障害者や若者の多世代型の集合住宅を、一定の地域（人口6000人）ごとに建設する資金を、国や地方自治体が無利子で貸し出し、それぞれの地域の必要に応じて、公共的に利用する部分の建設費は、国や地方自治体が負担する。

地域を担当して働ける人材を確保する方法

☆自治体の生ゴミ分の収集費用を人件費に当てて、メタンガス発電の材料として生ゴミなどを収集する人材を地域ごとに確保して、集合住宅での発電設備の維持管理を含め、地域活動の要員としても活躍してもらう。

ところで、日本人一人が一年間に廃棄するゴミは、全ゴミ量267.13kgの内、生ゴミ分（植物の残滓も含む）87.46kg（平成18年度の東京文京区のデータ）で、これ以外に食品を157.91kg（平成17年の農水省の食品廃棄物のデータ）を廃棄して、食品廃棄物を除くゴミの焼却処理で、全ゴミ当たり103.4kg、生ゴミでは27.69kgの炭酸ガスを排出している。もし、これを、日本の人口1億2000万人として、6000万人分の生ゴミをメタンガス発電に回すと、1トンの生ゴミで約6000円分のガスが発生し、ガスタービンで発電すると約6000円分の電気（東京ガスの社員の示唆）になるので、年間314億8600万円分の電

気（一地域ごとでは 314万8600円分の電気＝電力会社の 1 k w hあたりの発電コストがいくらかわからないので 314億8600万円分の電気は何万 k w の電力になるか不明）と温水を得た上で、焼却費用の1678億3659万9532円を節約できることになる。また、焼却で排出している炭酸ガス 166万1400トン分は、既存の発電で排出している炭酸ガス 166万1400トン分を削減したことになり、産業界が炭酸ガス 1 トンを減らす経費に 476ドル（×80円＝38,080円）かかるという試算（2009年末）があるが、炭酸ガス 166万1400トン分を産業界が削減した炭酸ガスとして排出権取引をしても、産業界は年間で 672億2024万4000円分の費用のほとんど出費せずに済み、日本全体で 1 年間に、ほぼ2350億5684万3532円の経費の削減につながる。

これに対して、500坪の土地に基本80世帯で 240人位の人が住める、メタンガス発電設備を備えた集合住宅を、坪単価80万円で建坪 300坪 5階建てで 100年住宅として、6000人の地域住民ごとに建てた場合、土地代を全国平均坪 100万円とすれば一棟当たり17億円かかる。これを、6000万人分として 1 万棟建てると総額17兆円かかるが、それぞれの集合住宅が 100年もつから、1年あたりの負担は1700億円になる。これにメタンガス発電設備と温水を作るジェネレーター 400万円やメタン発酵タンク代として試算2000万円×100 で年間24億円を加えても1724億円という計算になる。

この建設資金を、集合住宅を建設する住民に無利子で貸し付けて25年～30年で返済することにすれば、メタンガス発電設備やメタン発酵タンク代のほか公共的な使用に供する部分を公費で負担しても、大半の資金は戻って来るので、日本全体で 1 年間に、2350億5684万3532円の経費（これには生ゴミ発電をすることで減らせるゴミ焼却装置の建設と解体費用は含まれていません）を削減できることに変わりはありません。だから、国や地方自治体の懐は痛まないことになる。生ゴミ発電量に応じて減らせた炭酸ガスを、産業界が排出権取引で幾らかの負担（2%位か）をする以外は、建設資金の出所を国債を買い戻しする日本銀行にすれば、国や地方自治体に財源がなくても実現は可能となる。

これで、大人一人あたり最低月 3 万円ほどの家賃で住める住宅を 1 万棟、確保でき、さらに発電で 1 棟当たり年間 314万8600円分の電気と温水を得られる計算になる。

詳しくは、支え合う集合住宅のホームページ＝<http://www1.tcn-catv.ne.jp/sasaesai/>の「資金のない人が『支え合う集合住宅』を作るための方策」や支え合う集合住宅の建設に関する「企画書案」を参照してください）。

したがって、集合住宅の資金として平均17億円がまるまる土地と建物の建設資金にかかっても（実際には地域によって土地代の負担がかからない場合もあるはず）、発電設備や公共的に使用する部分の建設資金を自治体が負担して、住民が使用する発電分の電気代を集合住宅の建設資金の返済にあてても、最終的に貸し出した17億円は戻ってくるので、国と地方自治体・産業界の 3 者で、結局は 1 年間で2350億5684万3532円（100年で23兆5056億8435万円）の資金を浮かすことになる。

そればかりか、木材を搬出する地域では、アイ・ケイ・ケイ(株)の木材を低温乾燥する設備をメタン発電とセットで活用すれば、国内の森林資源を有効に活用して、日本の山林にも資金が回って人材を確保することで、山林崩壊を減らすことにつながられる。

★アイ・ケイ・ケイ(株)（東京・板橋区坂下 1-17-15 3967-4711・三田線志村 3 丁目）

こんな、夢のある処し方があるのに、それを実現しないで、あなたはこの先もこれまで

通りの生活を続けるのですか。

それとも、こうした方策に夢を感じているのは、私たちだけの思い込み？。そうだとし
ても、私たちは、自らのいのちを生かす生き方をして、人との間でもいのちを生かし合う
関わりを広げ、無縁社会といわれる日本の行政を、いのちを生かし合う社会に再創造する
サポートの役割をもたせたいと考えています。閉塞状況に陥っているといわれるいまの日
本が、問われている解決策が、ここにあると私たちは考えています。

だから「いのちをいかしていますか」と遠藤滋氏も問いかけています。

最近、私は自分のことを「障害者」と言うのをやめることにしました。もちろん、ひと
は私を見て「障害者」と言うでしょう。でも、それはそれで構いません。あえてそう言う
のをやめることを誰かに押しつけようとも思いません。

それではなぜそうすることにしたかと言えば、何も自分から自分のことを「障害者」と
いう枠に括（くく）ることはないかとふと気がついたからです。自分で枠に入れておいて、
何らかの障害をもつ者を差別するな、とは言えないだろうと改めて思ったのです。説得力
を持たないというだけでなく、そもそも自分の立ち位置に関わることでもあります。

それはそうと、私はこれまで「自立」という言葉をあまり使ってきませんでした。ひと
に合わせて言うことはあっても、自分のことについてはとても口はばたたくて言えませ
んでした。そもそも、今でもなお、自立が出来るような環境はどこにもありません。私の場
合は結婚によって家を出たのですが、なにかといえば親にも頼っていたし、また介助者グ
ループのひとたちひとりひとりにも事実上頼って生きざるを得ないわけです。意外に思わ
れるかもしれませんが、私は「障害者の自立」という言葉をほとんど口にしたことはなか
ったし、今はなおさらのことです。

代わりに、私はよくひとにこう聞きます。「あなたは、いのちをいかしていますか？」
と。この問いは障害を持っているひとにもそうでないひとにも区別なく発することができ
ます。そして、これが一番ひとの生き方の基本にふれた問いだと確信しています。

今から20年余り前、ちょうど私が歩けなくなって勤めていた都立光明養護学校を休職せ
ざるを得なくなるかならないかの頃、ある人と偶然再会しました。私は37歳になっていま
した。その人はポリオの後遺症で、片足が不自由でした。同い年でもあったので気が合っ
て、人生ちょうど半ばにさしかかってそれまで見聞きしたこと、出会った人達の書いた文
章などをまとめて本にしてみようということになりました。そうして出来たのが『だから
人間なんだ』です。イラストから表紙の絵まで、全て障害のある人たちだけによって成っ
た本です。1985年のことでした。

「いのちを肯定する障害者の五原則」として、①自分からにげないこと。②自己規制を
しないこと。③自分で決めること。④今やりたいことをやること。⑤すべてを生かすこと
。……これがこの本の結論として書かれていることです。作っている間は障害をもつだ
けを対象として考えていたのですが、出来てみるとこれは障害があろうとなかろうと全
てのひとに共通して言えることだと気がつきました。それで一挙に世界が開けました。

それまでは「健全者の世界」は私にとって見通せない世界でした。1974年に教師として
都立光明養護学校に採用されたのですが、「一人の余計者」として絶えず差別され、いじ

められる日々でした。自分が出た学校でこんな扱いをうけるとは想像もしていなかったのです。闘いの毎日でした（1982年『苦海をいかでかわたるべき』上下巻社会評論社）。

そしてその頃、私は小田急線の梅丘駅にスロープをつける運動に関わり、3年かかってそれを成功させると、1980年に世田谷区に対して、介助の公的保障を求める運動を地域の仲間たちと始めたのです。その時の合言葉は、やはり「差別の糾弾」と「障害者の解放」でした。「健全者」は「障害者」を差別し、引き回すものでしかありませんでした。「障害者」は狭いところに閉じこめられた者であり、「健全者」は、広くてすばらしい世界のなかで生きているに違いない、という思いこみから抜け出せていなかったのでしょうか。

もちろん、差別は社会的な構造をもったものであり、個人が意図的に差別するか否かに関わらず、この世の中に生きているかぎりそれからまぬがれ得ない、という側面をもってきます。でも、よく考えてみるとその差別の構造は、個々人の何気ないふだんの生き方そのものによって、支えられているのです。いのちをありのままに生かすのではなく、むしろそれを殺す生き方によって。たとえば自分を評価するのに、あるひとつの価値観で自分をひとと比較して、劣等感に陥ったり、優越感に浸ったりしているような…。

あなたは、いのちをいかして生きていますか？ 一度かぎりの、ありのままのいのちを。世間体や打算の世の中に流されて生きてはいませんか？ 障害を持っていると、そんなものに流されることはできません。障害というのは、だから契機となるのです。そんな意識にあふれた世の中のありかたをしっかりと見通す目をもつ…。

立場は逆転しました。いま、私は「健全者」の世界を見通せるようになりました。そして残念ながら障害をもつひとたちの中にも、いまだ世間体や打算の世界から抜けられずにいるひとが少なからずある、ということも分るようになったのです。

とはいっても、私のからだの機能は日に日に落ちていっています。また、現実には「障害者自立支援法」などというものができ、介助を受けるのに制約となることがとても多くなってしまうました。今回の政権交代を機に「自立支援法」に代わる新法を当事者感覚によって作らせる運動は続けざるを得ない。

でも、たとえどんな姿であろうと、いのちをいかし、いかしあうと決めてそのとおりにする…。それは障害をもつ者にとって、もっとも無理がなく、しかも輝かしい生き方なのです。世の中の人々がなんとおもうと。そしてそれは目立った障害のないひとにとっても同じことであるはずで。それさえあれば差別など、もう問題ですらなくなるような…。

じつは、私はそういう生き方を共有しようとするひとたちと一緒に、「ケア生活館」と称して都内に単身世帯を含めて約50世帯が入居できるような集合住宅を建てようといういろいろ考え、実践してきました。そしてそのための第一歩が西伊豆松崎の甘夏のみかん山だったのです。このみかん山には、毎年放っておいても甘夏がどっさりなるし、桃やキーウィなどの果樹も植えてあります。山菜、タケノコなども生えてきます。他の団体のイベントに使ったこともある。私の教え子にあたるひとがやっている「ゆうじ屋」に提供しておいしいケーキの材料にもなりました。今は一時頓挫しているとはいえ、これからもなんとかよい方法を考え、あきらめずに続けてゆきたい。

私が生きている内に実現できるだろうか、とも時々考えますが、地域の再生という課題の中にしっかり位置付けることを通して実現できないだろうか、と今は考えています。

みなさんも一緒に考えませんか？ そして独自に多摩市にでもよいから実現させてみま

せんか？ 少しおおごと過ぎるようにも見えるでしょうが、さっき言ったような規模があれば実にいろいろなことができます。例えば生産地から魚や野菜などを共同購入するとか、ゴミを集めて発酵させ、発生するメタンガスを燃やして発電するとか…。

こんな夢のような提案をして、私の今日の話を終えることにしたいと思います。

2009年12月5日

いのちを生かしあふ絆 あけび平成十七年十一月号掲載

障害をいかにとらへむ過ぎし日に煩悶したり言挙げつつも
絶望の淵より立ちしわれらゆゑいのち生かすに何を恐れむ
ふたつなきいのちを生かし生かしあふ世界つくらむわれらが手にて
わが夢を必ず夢には終らさじかかる想ひを一途に生きむ
わが機能ひとつ損なふそのたびにまた湧き来る新たな意欲
汝と我そが異なるを痛切にみつむるがゆゑ思ひを遣らむ
生ひたちの異なるがゆゑおもしろし距離をはからむ生かしあふため
肉薄を怖るるあまり距離さえもはかれぬひとの多かるべしや

還暦に あけび平成十九年八月号掲載

大揺れの体調にただ翻弄をされつつ迎ふ今日は還暦
できうればただひっそりと過ごしたしわが六十歳の誕生の日よ
「えんとこ」の監督はやくも持ち来る赤シャツ頭巾そこにパンツまで
六十年ああ六十年よ障害の身を支えこしわがいのちなる
足裏の皮膚を破りて針金のあまた突き出づ古人形のごと
憲法とともに歩みし六十年その精神をわれ誇りとす
われにとり国愛するはただひとつ現憲法の不戦の誓ひ
体調の荒き波間に揉まれつつふつつ滾るわが創作心

摘まれしいのち あけび平成二十一年一月号掲載

好もしき母娘(おやこ)なりしを突然になにやありけむ心中の報
麻痺持てる故に生まれし恋の詩に深く共感せし君なりき
君はわが教へ子にして利発なる故に未来を期待されにき
自らはいふに及ばず咲き初むる我が娘のいのちまで摘みしとは
夫への抗議ならむや我と我が娘のいのちまで奪ひ去るとは
知人への情すなはち仇となり債務負ひしが悲劇を生みし
いざ世にて羽撃かむとせるその時にいのち断たれし君は教へ子
きらきらと輝く君の眼をば思ひ出づるにいよよ切なし

琵琶法師語り継ぎたり公達の治承寿永の盛衰の様
仏教の本義にあれど世の無常あへて説きたる「方丈記」はも
いつの世に誰が作りしやいろは歌仏の教へよくぞ込めたる
日本の初の歌曲か「荒城の月」は照らせりこの世の栄枯
なにとなく諸行無常といふことの思ひ出さるる昨今の世
金融の危機と不況は深まりて底見えぬまま行方もしれず
ひたすらに仏の御手にすがるとふ教へのありて解き放たるる
無常なる世にありてこそわが命ひたに活かして共に生きなむ

なお、遠藤滋氏が詠んだ歌は、ホームページ「えんとこ」をご覧ください。

物心つく頃から、障害と出会ってしまう人は、自分がどんないのちの姿をしていても、その自分から逃れては生きていけないことを若くして学び、その自分をまるごと生きていくと自覚し決断するチャンスを与えられている。

私の場合でいえば、小児マヒという病気の後遺症で発育不全を起こして、左足の腰から下の筋肉や骨格が十分に発育しなかった。その足を「足が悪い・劣っている」という周りの言葉（評価）に惑わされて、「足が悪い」だからダメなんだという劣等感を、私は少年の頃に持つはめになった。この劣等感に対する格闘の中で、私は、ある時期から、この自分で生きていくと覚悟することで、自分をまるごと受け入れるようになった。

改めて、自分をまるごと引き受けて生きるということは、病気や怪我で自分の肉体的・知覚的部分で機能が旨く働かなくて、能力が十分に発揮できなくなっても、その部分の自分もまるごと引き受けて生きるということであり、そこでは、「私にも劣っているところがあるから障害者と同じよ」などと、病気だからとか、劣っているからと「泣き」をいうのではなく、病気でも、能力が十分に発揮できなくても、その部分の自分も引き受けて、病気の自分も、能力が十分に発揮できない自分もしっかり生かして生きると、自分で決めて生きるということにある。

だから、脚力が弱い上に、おまけに、普段からの運動不足がたたっていた私だが、2年前の2008年5月、健脚の人が、10時間で行って帰ってきちゃう屋久島の縄文杉までのコースを、私の左足は、途中途中「ここまでにしようか」なんて何度も同行してくれた友人に弱音を吐きながら、休み休み11時間かけて縄文杉まで運んでくれ、9時間かけて元の場所まで70kgもある私の体を運んでくれた。だから、私の左足は「悪い足」でもなんでもなく、能力に限界があっても「すごい足」なのだといえるし、健脚の人の倍の時間をかけても私を運んでくれる左足を、私は誇りに思うし、その左足に「しみじみと感謝する心」を私は持てるようになった。それなのに・・・

初めて「はいはい」できた時、初めて掴まり立ちできた時
初めてひとりで歩けた時、笑顔で無上の喜びを表せた時があった
目を合わせて言葉をかけられると 満面の笑顔を見せてくれた
バギーに寝たきりでいた少女の ひととの出会いは無上の喜びに満ちていた

だから いまそれができたら 喜びを感じて一日を過ごそう
今日それができたなら 喜びを感じて明日を迎えよう
いつか忘れてしまった感激を取り戻し
そして 何はともあれ いのちにありがとう

どこにいても 何をしていても どんな姿でいても
まだできることが残っていて それを生かせること
ができるなら 何はともあれ いのちにありがとう

と言って、いま現在の自分をまるごと引き受けて、その自分を生かしてくれる自分のいのちを誇りに、自分のいのちを生かして生きれることに感謝して生きているという声を、私はかつて聞かされたことはなかった。

多くの人々が、「幸せ」を「お金」に置き換えて、「お金」さえあれば「幸せ」になれるという思い込みの中で、個人の枠、個々の家族の枠の中で、自分だけ自分たちだけがなんとかかなればよいという生活に埋没して、他人のことは「ひとごと」として「無視する・気に止めない・かかわらない」社会的関わりを生きてきた日本にあって、体の機能に障害を抱えて自力での生活を維持できない人を、自分の生まれ育った地域で暮らしていけない状況におとし入れ、長い間、その地域から放り出す状態を続けてきた。

その結果として、自力での生活を維持できなくなる高齢者に、日本の多くの地域住民が「ひとごと」として、無視してかかわらないことが、刃（やいば）となって高齢者に襲いかかる役割を果たし、高齢者を死に追いやる状況すら生んでいる。

こんな社会の状況になったことを、他人（社会や政治）のせいにしてしている限り、私たちは、自らの（社会としての）解決力を手にすることはできません。私たちの目的は、地域住民自らの社会的な解決力を手にすることにあります。

そこで、利息で人の首をしめない基金を創設するために

私たちは、地域の拠点となる「支え合う集合住宅」のモデルケース創りを計画しています。しかし、未だに土地代を含め建設にかかわる資金を作り出せません。いまこそ、利息のいらぬ資金を基金として確保する仕組みが必要です。そうすれば1棟といわず、基金に応じて、東京以外でもモデルケースになる「支え合う集合住宅」の建設が可能になります。資金面で力を発揮できる団体、ならびに個人の支援・協力を求めています。利息で人の首をしめない基金の創設で、利息で人の首をしめない社会創りを始めませんか。

そうすれば、希望する人が、一定の地域ごとに集まった時、最初に資金を拠出できない人も参加して「集合住宅作り」を始められるのです。

あなたもあなたのできることから始めませんか。

2010.10.4 「支え合う集合住宅」を創る会 遠藤 滋
白砂 巖

資金のない人が『支え合う集合住宅』を作るための方策

生ゴミの焼却処理をやめ地域にメタン発酵の発電設備を備えた集合住宅を

生ゴミ処理の転換で温暖化対策・防災対策の住宅政策のシュミレーション

一人になって、人の助けが必要な障害者や高齢者が若い世帯と住み合って、住む人それぞれがやれる手助けをしようことで地域で暮らし続けられる、支え合って生きる集合住宅を作りたいと考え、その集合住宅では、トイレの排水でメタンガスを発生させて活用することを考えてきました。

そこへ、近年の温暖化。空気中に滞留する水蒸気量が増えているので、夏期のゲリラ豪雨に止まらず、冬には、寒気が吹き込んでくることで、大雪に見舞われるようになりました。これまで、生ゴミは焼却しても温暖化の促進にはあたらない、と言われていたが、ただ燃やすだけでは、温暖化を促進させることにはかわりはない。そこで、生ゴミも、焼却のための焼却はやめて、徹底して生かす方策を考えました。

それは、家庭で出す生ゴミをメタンガス発酵処理して、ガスエンジン方式で発電し、余熱で温水を得て活用するシステムを併設した集合住宅を一定の地域ごとに建てることで、温暖化を促進させない対策に寄与するだけでなく、災害時には、自家発電設備を備えていることで、一定の地域ごとの救援拠点として機能できることとなります。こうした集合住宅を、安い家賃分で住めるようにすれば、住宅困窮者を減らすことにつながるので、こうした集合住宅を100年以上もつ強度を基本に、一定の地域ごとに建てる建設資金を無利子で貸し出す仕組みを政策として、国と地方自治体を実現することを提案する。

また、集合住宅の管理は、住人が株主になって運営し、建設資金を返済する方法を提案します。詳しくは、企画書（『支え合う集合住宅』のホームページを参照）

<http://www1.tcn-catv.ne.jp/sasaeai>

生ゴミで発電することで、どんな利点が生まれるのか、私が持ち合わせている、東京文京区（人口約18万人）の平成18（2006）年度のゴミ処理量と処理費用のデータをもとに、少々乱暴な話ですが、日本のゴミ処理量と処理費用を推計してみると、

文京区は18年度に、全ゴミ量48,084トン（資源ゴミ・焼却不能ごみも含む）の収集に22億5275万5000円かけて、焼却費用として清掃組合への負担金8億8100万円（内焼却電気代約14,726kwhで2611万4000円・内焼却ガス代約74,780m³で392万円）を支払っていて、合計31億3375万円かけている。

この内、可燃ゴミ32,341トンの内訳は、プラスチック類16,598t・内生ゴミ15,743t（プラスチック類収集時に含まれた分も追加）だった。

	収集費用	焼却費用	合計	炭酸ガス
全ゴミ量48,084 t	2,252,755,000円	881,000,000円	31億3375万円	18,613 t
プラステック類	777,623,065円	592,555,133円	2,107,744,166円	13,628 t
1 t 当	46,850円	18,322円	65,172円	154,662円
内生ゴミ15,743 t	737,565,967円	288,444,867円	1,026,010,834円	4,985 t
1 t 当	46,850円	18,322円	65,172円	205,819円

※全ゴミ収集費用円÷全ゴミ量トン×生ゴミ量トン=生ゴミ収集費用円で算出

12000万人分 一人当 収集焼却費 1 kg当 炭酸ガス 1 kg当

全ゴミ	約3205.599万トン	267.13kg	17,409円	65円	103.4 kg	186円
生ゴミ	約1049.533万トン	87.46kg	5,699円	65円	27.69kg	238円
食品廃棄物	1895万トン	157.91kg			50.00kg	

※平成17年度(2005)に1895万トンの食品を廃棄。農水省のデータ

	一人当	4000万人当	6000万人当	12000万人当
炭酸ガス	全ゴミ 103.4 kg	413万6222トン	620万4333トン	1240万8666トン
排出量	(内生ゴミ 27.69kg	110万7777トン	166万6666トン	332万3333トン)
	食品廃棄物 50.00kg	200万0164トン	300万0246トン	600万0492トン

ちなみに、産業界が炭酸ガス1トンを減らすのに476ドル(×80円=38,080円)経費がかかるという試算がある(2009年末)という。一方、生ゴミ焼却費用288,444,867円で4,985tの炭酸ガス発生を発生させるので、生ゴミで発電すると1トン当たり57,862円の焼却費用と発電した電気を電力会社で発電した場合の二酸化炭素放出量×産業界の負担分1トン当たり38,080円(合計95,942円)を減らすことになる。日本の人口のうち約半数の6000万人分が生ゴミを焼却に回していると仮定して計算すると、

生ゴミメタン処理・発電施設=6000人分で1か所設けるとして全国では1万箇所。
 生ゴミ1kgで60ℓのメタンガスが生成されたというデータを基に試算。
 生ゴミ1トンで60,000ℓのメタンガス=都市ガス6000円=6000円分の電気を発電

生ゴミ	年間	収集焼却費	炭酸ガス排出
180000人分	15,743トン	1,026,010,834円	
6000人分	524.7666トン	34,200,361円	166.166トン
6000万人分	524万7666トン	3420億0361万1333円	166万6666トン

これをメタン発酵してガスエンジン方式で発電すると、炭酸ガス6000万人分166万6666トン×焼却費57,862円で年間964億3662万8092円を節約し、さらに年間314億8600万円分の電気と温水を生むことになるので、合計1279億2262万8092円になり、年間に生ゴミ収集費用を2140億8098万3241円しか使わなかったことになり、さらにこの発電量分の炭酸ガス×1トンあたり産業界負担分38,080円を減らすことになる。

ガスエンジンとジェネレーターで400万円?とタンク製造費は別予算か?

6000人分の生ゴミをカバーできる3㎡の発酵タンクを37~38°で保温=10日のサイクルで発酵完了。

発酵タンクの保温には風力・太陽光発電を活用。タンクは断熱材で覆う。

風力・太陽光発電も追加。雨水や発酵後の水溶液から再生水を取り出す。

残りの水溶液は肥料や海水のミネラル補給に活用する。

都会では発電材料に廃棄植物やスーパー・商店の廃棄生ゴミなどで発電量増。

酪農地域は動物の糞尿もメタン発酵に活用。

余熱で温水を確保して、ガス使用換算で二酸化炭素放出量を削減できる。

災害対策として6000人に1か所、電気・水・風呂・トイレを確保。焚き出しも可能。

建物の鉄筋の入れ方・コンクリートの強度や壁の厚みなどを全国一律にして、構造計算は1回。部屋の配置や各部屋内部は独自性を発揮する。

以上の条件で集合住宅を、国や自治体の政策として実行する案

全国平均坪?110万円×土地約 500坪+建坪1500×坪80万? で集合住宅を建設すると
 1棟当たりの建設費12億円で合計17億5000万円で、1世帯平均2125万円となる。
 これに約80世帯 240人(内訳家族世帯55・独身10・障害者5・高齢者10)が住み、
 応分負担で、収入の3割位の家賃

建設資金の返済に公共使用分(これを2~3割として)の建設費を減額すると
 14億(1世帯当 375万円補助) ~ 12.25億(1世帯当656.25万円補助) となり

	年間	1月分
大人1人平均3万円で140人分として最低家賃	5040万円	420万円
生ゴミ収集費6000人分 737,565,967円÷30=	24,585,322円	2,048,794円
発電 6000人分 94,458,000円÷30=	3,148,600円	262,383円
トイレの排泄物でも発電×240人		
ほかに業者が出す廃棄生ゴミや草木・綿100%の衣類などの処理で発電量増。 雨水や廃液から再生水で水利用量の5割(風呂・トイレ・洗濯など)を賄うと 水道代の節約で下水道代も削減で	3,456,000円	288,000円
水道・下水道代の6割節約として	1人月1200円節約×240人で	
余熱で温水 風呂と冬の洗濯に利用で		
ガス代の節約 一人1日62円内31円で	2,715,600円	223,200円?
合計	81,156,884円	6,799,177円

内生ゴミ収集週5日年50週とシステム保守に 1600万円を人件費
 1日当たり1200人分2187kg収集 4人で(1人 547kg収集) 年収 400万円
 ~5人で(1人 438kg収集) 年収 320万円
 したがって 返済金 64,800,000円 540万円で

返済は3年後からで建設資金は21年7箇月~18年10箇月で完了。

また、住民力で、子育て支援、地域への介助者の派遣・給食サービスなどができる。
 屋上は温室栽培の農園としても活用。

メタンガス発電(ガスエンジン方式)の利点

	人口18万人あたり	人口6000人あたり
生ゴミ焼却分費用	288,444,867円を削減	9,614,828円を削減
発電量1年で	94,458,000円を削減	3,148,600円を削減
合計	382,802,867円を削減	12,763,428円を削減

以上の集合住宅を、国全体の政策として実行する案

人口1億2千万人 6000人で1棟、1万棟を建設すると
 当面6千万人をカバーするには、1万棟×17.5億円=17.5兆円で240万人分の住宅
 5年がかりで、資金を捻出すれば、1年度3.5兆円で2千棟ずつ建設可能。
 ガスエンジン方式の機器の更新・修理などのランニングコストを抜きにして考えると、
 生ゴミをメタン発酵してガスエンジンで発電する設備を設けた集合住宅を2千棟ずつ建設
 すれば3.5兆円で、2千×6000人分の生ゴミを収集焼却処理した場合国全体で684億0072
 万2666円費やすのに比べて年間192億2965万6000円の節約ができ、さらに年間62億9720万
 円分の電気と温水を得て、年間255億2685万6000円がうき、生ゴミの年間処理費用を国全
 体として428億7386万6666円しか使わなかったことになる。

したがって、1万棟建設すれば、その5倍=収集焼却費3420億0361万3330円の内、1276億3428万円がうくので、生ゴミの年間処理費用を国全体として2143億6933万3330円しか使わないですむことになる。

返済は3年後からで建設資金は21年7箇月～18年10箇月で完了。

3年後から1棟の家賃として6480万円×2000棟=1296億円を返済するとして

1年目 国は3兆5000億円を支出。

2年目 国は3兆5000億円を支出。

3年目 国は3兆5000億円-1296億円=3兆3704億円を支出。

192億2965万6000円の焼却費用を節約し、62億9724万円分を発電

4年目 国は3兆5000億円-1296億円×2=3兆2408億円を支出。

384億5931万2000円の焼却費用を節約し、125億9440万円分を発電

5年目 国は3兆5000億円-1296億円×3=3兆1112億円を支出。

576億8896万8000円の焼却費用を節約し、188億9160万円分を発電

6年目 国は1296億円×4=5184億円返済される。

769億1862万4000円の焼却費用を節約し、251億8880万円分を発電

7年目以降、国は1296億円×5=6480億円返済され、

961億4828万円の焼却費用を節約し、314億8600万円分を発電

耐用年数 100年の集合住宅を建てた場合、5年間の17兆5000億円（実際は16兆7224億円だけ出費）で240万人×少なくとも2世代(480万人)分の集合住宅を確保して、1年で961億4828万円の焼却費用を節約した上314億8600万円分の発電で、合計1276億3428万円の節約になるので、100年で12兆7634億2800万円となり、その差額は約5兆円で、年間500億円しか使わない計算になる。

さらに314億8600万円分の発電で排出する炭酸ガス量×1トンあたり476ドル(×80円=38,080円)が産業界の負担軽減になる。また、生ゴミを除いたプラスチック類は、リサイクルできるもの以外をどうしても焼却する場合は、すべて発電の燃料にして処理すれば、6千万人分の炭酸ガス453万7667トンをただ排出することにならないだけでなく、発電による電気を得られる。

また、個々の集合住宅は、その発電量に見合った炭酸ガスを削減するので、その削減量に応じた炭酸ガスの排出権取引による利益を得られる。

こうした生ゴミで発電する設備を備えた集合住宅の建設に無利子で資金を貸し付けることは、国や地方の負担にならないだけでなく、産業界にもメリットがあり、また、住居地域の再開発の柱となり、大地震の場合の災害対策費や損害を減らせて、自治体の持ち出しが減り、ゲリラ豪雨の減少につなげられる。

温暖化を促進させない生活を実現する新たな社会システムを構築する手始めに、モデルケースのため1000億の基金で各県に1棟+αで60棟程度の集合住宅を建設する政策を実現しませんか。
『支え合う集合住宅を創る会』白砂 巖

■参考	平成20年大人5人幼児2人家族で	年間	一人月
データ	電気代	支払い 255,616円	3,043円
	ガス代 冬床暖房1部屋使用	支払い 157,439円	1,874円
	水道・下水道代	支払い 178,071円	2,119円

企 画 書

高齢者・障害者・多世代家族の支え合い型集合住宅

生ゴミのメタン発酵発電で温暖化に加担しない集合住宅

災害時に地域住民にトイレ提供する支援拠点の集合住宅

生ゴミのメタン発酵プロジェクトで地域再生の集合住宅

支え合う集合住宅を創る会 起案・白砂 巖

高齢者・障害者・多世代家族の支え合い型集合住宅

そもそもの「支え合い型の集合住宅」を創りたいという発想の出発は、団塊世代の私と遠藤滋氏が29歳（1976年）頃に出会ったことから始まります。仮死状態で生まれて脳性マヒになった彼は当時、光明養護学校の教師として採用され活躍していた。一方の私は、1歳4か月頃、小児マヒを引き起こすウイルスに感染して軽度の後遺症に見舞われていた。

その後、子育ての時期に行き来したあと、しばらく離れていた期間があって、1984年10月、しばらくぶりに私が彼の家を訪ね再会した時、彼は自力で歩けなくなっていました。原因は頸椎の変形による神経のマヒであることが、後になって判るのですが、その頃は、まだ原因がはっきりしませんでした。

私はたまたま、小児マヒのウイルスに感染した時、発病しましたが、ほとんどの人はその人の免疫がまさって発病はしません。また、私の障害にしても現状は軽度ですが、もし小児マヒを引き起こすウイルスが、頸椎や脳の神経を傷つけていたら、寝たきりの生活を余儀なくされていたし、若いうちに死んでいたかもしれません。だから、重度障害者の理不尽な社会的立場は、私にとって人ごとではなかったのです。

そんな意識をもつ私と彼は、当時、「障害者と健常者の世界は違う」と障害者や健常者の共通した認識に違和感をもっていただけから、自分たちが障害を伴って生きて感じてきたことをこらでまとめてみようと考え、作った本が1985年7月に自費出版した『だから人間なんだ』でした。この本を編集する過程で、私たちは「ありのままのいのちを肯定して（生かして）生きる」と自分で決断して生きればいんだということに気づきました。そこで、二人で「せっかく障害者として生きるようになったのだから」、これからどんなことをやっていこうかと話し合っただけで一致した答が、この先、例え誰にも見向きもされず実現することなく二人が人生を終えたとしても「一人暮らしになってしまう重度の障害者が施設にいくしか選択肢が残されていない現状を変えるため、地域で暮らし続けられるケアを前提に暮らし合う集合住宅を創っていききたいね」というものでした。

また、いのちが傷つくことがあっても、自分という意識を支えてくれる限り、そのいのちに感謝し、そのいのちを誇りにして、すべてを生かして生きていくという生き方をしたいという思いもあって、一つの集合住宅に住んでいる人がそれぞれの力量に応じて支え合い、共用の食堂や広めのお風呂などを別個に設備して運用するシステムがあれば、お互いの生活の中で、一人暮らしになる高齢者や障害者の寝たきりになった生活も側面から容易に支え合うことができると考えました。そして、この集合住宅では、自分たちの出すトイレの排泄物（有機物に限る）や生ゴミを生かして、メタンガス発酵して活用すれば、災害時にも自分たちは最低限の生活を確保できるという構想を持っていました。

過去の日本の状況は

しかし、ここ何年かの間に、温暖化の問題が、地球規模で深刻な状況になりつつあるという報道がされています。現に、過去における文京区の状況を見てみると、1460年代の関東の海岸線は次の図の通りだったという報告があります。

それを裏付ける話として、1184春、源頼朝よりとも（1147~1199. 1）（源義朝と母は熱田大宮司藤原季範の娘の三男）は東国追討の時、現在の東京の飯田橋を見下ろせる文京区春日の入江の松に船をつなぎ、波のなぐのを待つ間、夢に菅原道真が牛に乗って現れ吉兆が2つあることをつげ、夢から覚めると牛にた石が傍にあり、のち御神を勧請したのが牛天神（北野神社＝東京都文京区春日）にな

ったという伝えがあります。

また、1486年6月～1487年にかけて、北陸から越後を経て甲斐や関東を旅行した聖護院道興どうは、現在は文京区の千川通りの道路下の暗渠になっている小石川に立ち寄った時「我方を思ひふかめて小石河いつをせにとかこひわたるらん」と詠んだ川の情景がありました。

1460年代の海岸線が、どういう地球の環境下にあったのかわからないので、それが、現在の地球の温暖化と重なる話とはいえないにしても、過去に、日本の海岸線が、現在の海岸線よりずっと内陸にあった事実がこの図に現れている。実際に文京区にある小石川植物園内の高台の貝塚からは、大和シジミだけでなくアサリやハマグリを含め13種類の貝殻が出土しています。

今後、地球の温暖化が進んだからといって、同じようになるとはいえないにしても、その可能性がないといえないのも事実。

現代の温暖化の影響について

温暖化による海水面の上昇に関して二つの報告がある。一つはアル・ゴア氏の『不都合な真実』（監督デビス・グッケンハイム）で、グリーンランドの氷河の氷が溶けると海水面が6m上昇するという研究者の計算結果である。

もう一つは、IPCC（国連の気候変動に関する政府間パネル）が出した統合報告書で、ここでは、21世紀末に世界の平均気温は1980～1999年の平均と比べて1.8度～4度上昇と予測、海水面の上昇は最大59cmというもの（2007.11.17の朝日新聞の記事）。

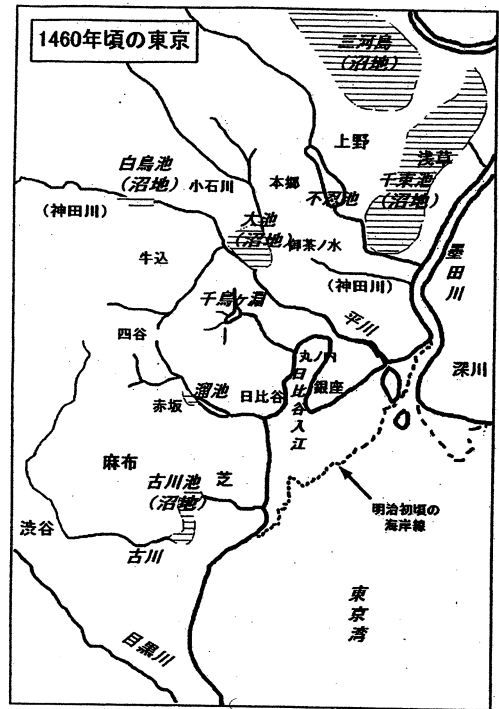
また、温暖化は、一方で台地の乾燥を招き、一方で台地や海水から蒸発した多量の水蒸気による集中豪雨の拡大を、すでに日本も含めて世界各地で招いている。この結果、人が亡くなる被害も含めて、これまでにない被害を生じさせている。

そこで、神田川の水道橋付近で水かささが6m上昇すると、どういうことが起こるのかを想定してみよう。現在、神田川の水害対策に喧伝されている環状7号線道路下の地下貯水トンネルは、普段の降雨の増水によって常に水浸しになる可能性があり、梅雨時の集中豪雨や台風のたびに、文京区の川の周辺地域や高台以外の谷すじが洪水に見舞われることは避けられなくなる。しかも過去に、文京区の谷筋が、水辺だったという先例がある以上、温暖化の結果、海水面が6m上昇するという指摘の影響を、まったく無視して生ゴミを含めたゴミを焼却処理しつづけることは自治体の姿勢として無責任であるといえます。

また、こうした温暖化の進行を前に、私たち生活者が、将来予測を軽くみて、まだまだ何もしなくて大丈夫だと他人任せにして、これまでの生活様式を変えずに、節電する程度の対応でお茶をにごしたままでいいのか、それとも、最悪の結果を前提に、そうした事態を招かないために徹底した対策を取り入れた生活や社会の仕組みを作るために、自分たちから進んで行動するのが、いま問われているのです。

自分の生活様式を変えずに徹底した対策をしないでお茶をにごして、自分には関係ないと私たち

1460年代の関東の海岸線



がやり過ぎことは、私たちの生活が温暖化を促進させ、加担することになり、日本だけでなく、地球規模で災害や人への被害の拡大を黙認することになります。

おまけに、もっと問題なのは、私たち人間は、自分たちの経済活動も含めて生涯に多量の酸素を消費して炭酸ガスを排出していますが、炭酸ガスを酸素に還元するための対価を誰一人として払わないばかりか、逆に炭酸ガスを酸素に還元するための自然を人の営みが直接破壊している上で、温暖化による自然破壊に手を染め、自然破壊を加速させることになるのです。

いま私たちに出来ること

したがって、私たちが実行する温暖化防止策が、単に、家庭内の節電だけで自己満足していいの？という根本的な問題があります。私たちの出す、生ゴミやプラスチックのゴミの焼却で、排出される炭酸ガスをそのままにしておくということは、節電で減らせる炭酸ガス以上の炭酸ガスを発生させることになっているのではないかと。そうであれば、本当にこのままでいいの？と、都会で暮らす人に訊ねたい。また、ゴミの焼却で発生する熱源を徹底的に生かさないのであれば、ほんとうの意味で温暖化の防止にはつながりません。

ドイツでは、熱利用率75%を達成しないゴミ焼却場は作ってはいけないと法律で取り決めていると聞きます。日本でもゴミ焼却場の中には、ゴミの焼却で発生する熱源を使って発電しているところもあると聞きます。しかし発電だけでどれだけの熱利用率を達成しているのか疑問です。実際、東京23区内（世田谷区を除いたものか）のゴミ焼却場は、ゴミ焼却で発生する熱利用率は12%で、今後利用率を上げて20%ほどにしかならないといえます。

日本では、生ゴミを含めたゴミ処理では、川に流したり海洋投機をする垂れ流し方式が取られてきました。焼却場からのダイオキシン類の発生が問題になった時も、当初は知らんぶりのほっかぶりを決め込んで、煙にまじってダイオキシン類や重金属類を垂れ流したままでした。焼却炉を改良してからは、ダイオキシン類は少なくなったとはいえ、以前にも増して煙にまじって重金属類が飛び散っているという調査結果もあるそうです。そしていまでも、生ゴミによる炭酸ガスの発生は、自然由来の再生可能な炭酸ガスの範囲内だから問題ないと、なおかつ熱利用率を高めることなく焼却熱の垂れ流しをしています。でも、焼却熱のそのほとんどを利用しないまま放出すれば、温暖化を促進させることは明らかです。

炭酸ガスの放出に関して文京区では18年度（2006年）の推計で、プラスチック類も含め可燃ゴミとして収集している36,693トンのゴミを8億7100万円の委託費用をかけて燃やし、生ゴミでは推計4,985トンの炭酸ガスを、プラスチック類では推計13,628トンの炭酸ガスを大気中に排出しています。1トンあたりの焼却費用は2万3737円、これを人口18万として概算で割ると、一人当たり2076円かけて年間103.4 kgの炭酸ガスを大気中に撒き散らしていることになります。ちなみに、世田谷区を除く都区内21清掃工場では、約396億7500万円かけて焼却にまわしているゴミの全量から炭酸ガス約53万3164トンを出しているのが現状です。

一方、文京区では、資源ゴミも含めて48,084トンのゴミを集めるために清掃事業費に22億9184万円かけています。その内、文京区の生ゴミ類は「厨芥類12,706トン・草木類3,037トン」あり合計15,743トンで、草木類も含めた生ゴミの処理費用は総額7億5035万8609円。したがって、生ゴミ1トンの収集費用は4万7663円。これを人口18万人で割ると、文京区では一人の人が一年間に出す生ゴミ87.46 kgを4168円かけて集めていることになります。

したがって、文京区での焼却処分している生ごみ類の収集から焼却までの費用は1トンあたり7万1400円となり、一人あたり6244円かけて一年間に103.4 kgの炭酸ガスと利用していない焼却熱を大気中に撒き散らしています。しかしこれには、ゴミ焼却場の建設費や老朽化した焼却場の廃棄に

かかる費用は含まれていませんから、実際にはこれ以上の経費をかけてごみ処理しています。

これに対してドイツには、牛の糞尿を含めた生ゴミをメタンガス発酵して発電するだけでなく、余熱で沸かした温水を村人全体に供給して活用している酪農家をかかえる村があるそうです。日本でも同様に、酪農業が盛んな岩手県葛巻町では第三セクターとして、牛の糞尿を使ってメタンガス発酵のガスエンジン方式で発電したり風力発電に取り組んでいるのを見てきました。でもこの第三セクターは、町全体の酪農家と協同してガスエンジン方式の発電に取り組んでいる訳ではありませんでした（これは葛巻町のホームページで検索できます）。またカナダ・ノヴァスコシア州では、ゴミ処理を焼却することは一切取り止め、生ゴミ類は完全に堆肥化して処理しているそうですが、まわりに農業人口の少ない23区内では効率に欠けるものがあります。

ところで、これまで私は、集合住宅の住人だけで生ゴミをメタンガス発酵して活用して、支えが必要な高齢者や障害者の暮らしを支援する設備を設けること、また住宅に困っている若い世代や助けが必要な子育て世帯が共に暮らせる『支え合う集合住宅』として創ることを考えてきました。だが、最近の地球の温暖化に関する情報を見聞きすると、こうした集合住宅を、住人だけで自己満足してやっている場合ではないと思うようになりました。そこで、温暖化を促進させないための方策として、都会では発生する生ゴミをメタン発酵して発電する処理設備を、市街地の再開発をかねて一定の地域ごとに一定の規模の集合住宅に併設して建設することを、温暖化問題に杞憂しているすべての人に提案したい。そうすれば、周辺地域の高齢者や障害者の暮らしも支え合う機能をもった地域の拠点住宅になることでしょう。

こうした集合住宅のメタンガス発酵の設備を、集合住宅の住民だけでなく心ある地域の人たちと共に運用していければ、都会では周辺地域の家庭が出す生ゴミだけでなく廃棄される落ち葉や草木類を含めて、焼却による化石燃料の消費と炭酸ガスを無駄に発生させることなく電気と温水に転換して利用できるの、温暖化を促進させるゴミの焼却処分を減らす政策転換につながります。また大地震などの災害時に電気の供給が止まっても電気とメタンガスを燃やしてガスエンジン方式で発電の余熱でお湯を確保できるし、集合住宅の下水からの有機物もメタンガス発酵処理することで、災害時には周辺の地域住民にトイレが提供できる生活支援の拠点になることでしょう。

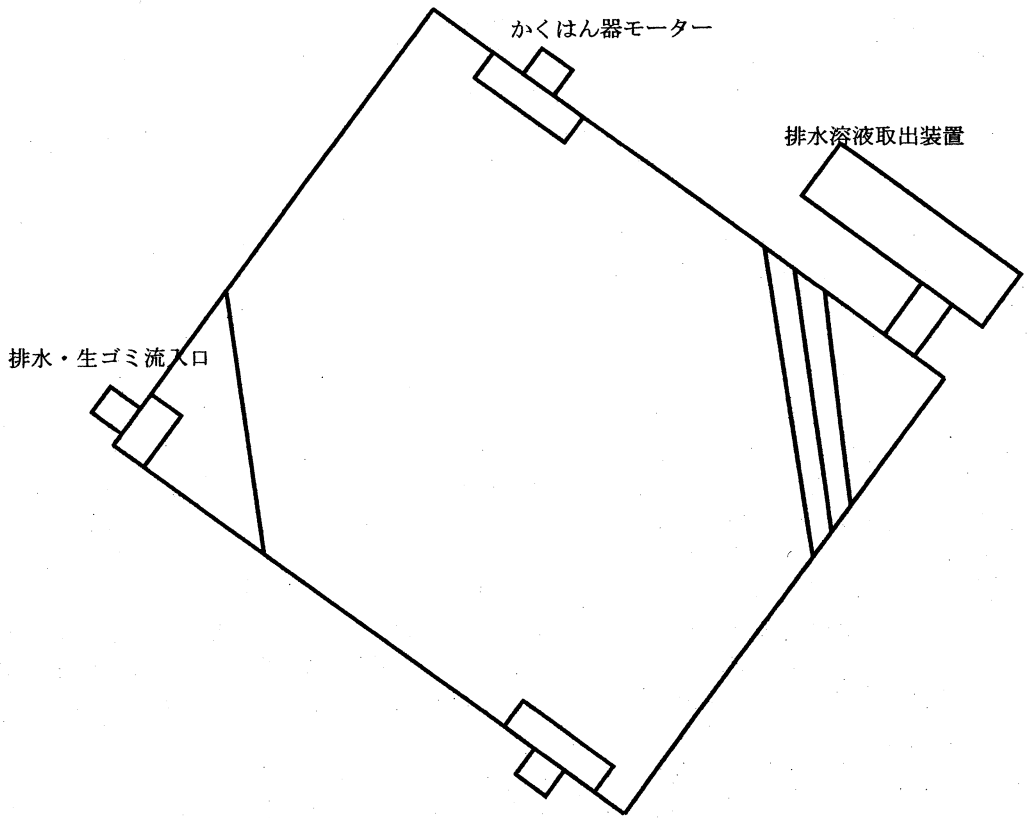
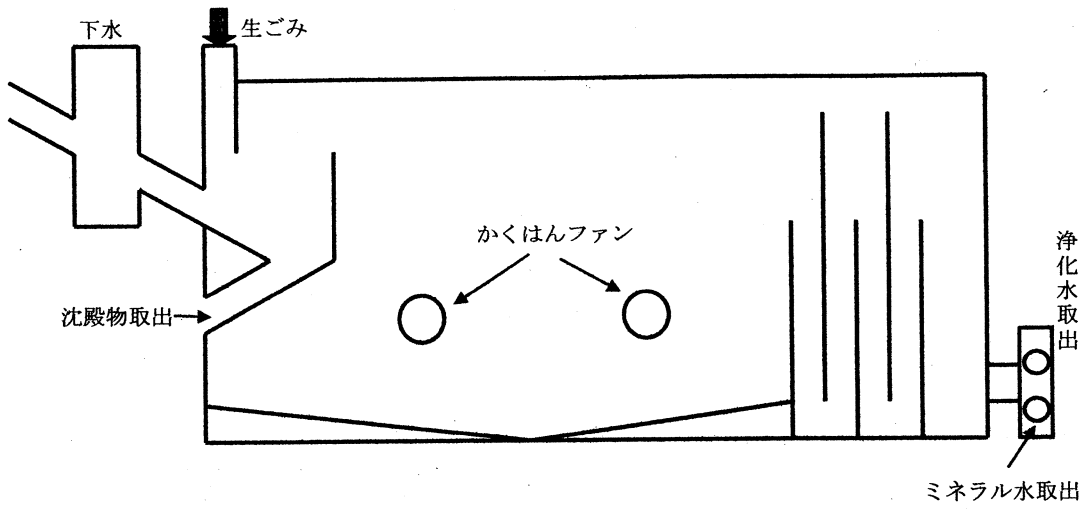
ところが、生ゴミのメタン発酵処理を実現する方法として、巨大なゴミ焼却場が変わって大がかりな処理場を別個に設けるという発想では、災害時に生ゴミを出す地域住民が活用できるかという、本来そういう考えの元に処理場を設置していないので役に立ちません。かといって、このような設備を、個々の持ち家に備えて維持するのは非効率なことです。

ところで、生ゴミ1kgでメタンガス60ℓを生成するという試算があります。そうすると、生ゴミ1トン（1000kg）で最大60,000ℓ（60m³）のメタンガスを生成できることになり、それを都市ガスに換算すると6000円にあたります。このガスを元にガスエンジン方式で発電できる電気は6000円分にあたり、1トンの生ゴミから生成できるメタンガスで発電できる電気は、私の記憶や計算に間違いがなければ最大で6000円相当になります。

つまり、生ゴミ1トンの収集と焼却までの費用7万1400円を節約し、発電することで最大6000円分の価値を生み出せるのです。おまけに、余熱で水を沸かして温水を手にするのです。つまり、生ゴミをメタン発酵処理してガスエンジン方式で発電すれば、ゴミの減量と処理費用を削減できるばかりでなく、焼却時に使用する化石燃料から発生する炭酸ガスも抑えることができます。また、この後に発電することで、発電した分だけ、火力発電で発生する炭酸ガスを減らすことになるし、余熱で温水を確保することでお湯を沸かす時の燃料の消費を抑えることにつながります。

さらに、屋上に降った雨水をため、雨水やメタンガス発酵後のミネラルを含んだ水溶液も浄化して再生水として活用するシステムを取り入れることで、非常時の飲み水など最低限の水を確保することにつながります。また、メタンガスを動力に自動車を走らせることだってできます。

メタンガス発酵タンクの構造案



なお、メタンガスで発電する方法には、燃料電池とガスタービン方式・ガスエンジン方式があります。メタンガス発酵の場合、発酵時に生成された炭酸ガスがメタンガスに混じるだけでなく、空気も混入する可能性があるため、燃料電池で発電する場合に問題が生じる可能性があるということです。ガスタービン方式の場合には問題は起こらないし、ガスタービン方式よりも発電効率が高いということで、私はガスエンジン方式の発電がいいと思っています。

ガスエンジン発電機 ㈱日立製作所
ヤンマーエネルギーシステム㈱
三菱重工業㈱
水の浄化装置 富士吉田市の会社
風力発電機 ゼファー株式会社（東京都渋谷区初台1-51-1初台センタービル）

改めて、どんな「支え合う集合住宅」を創りたいのか

1. 最初の発想は、両親が亡くなって一人暮らしになる重度の障害者でも、生まれ育った地域で暮らし続けられる「住宅システム」を創ること。それは、少ない年金の中でも取り合えずやり繰りできるものにする。こうした「集合住宅」なら、体の機能が衰えた高齢者の場合でも、役立つ「住宅システム」。
2. それなら、障害者だけでなく、高齢者も含めて他の世代の家族世帯や一人世帯とも共に暮らし多世代型の集合住宅にして、住民同士でできることは普段から、有償無償にかかわらず相互に支え合うことも含めた生活を、住民自らが住宅株式会社を立ち上げて管理運営し、経済的に困窮した人がでた時でも、追い出すようなことはしない集合住宅。
3. 温暖化対策として、生ごみや伐採されてゴミにされる木や葉っぱだけでなく、下水も含めてメタンガス発酵の処理をして、ガスエンジン方式で発電して電気と温水を得ることで、生ごみの焼却にかかる化石燃料が発生する炭酸ガスを減らし、自家発電によって得られる電力分の石油製品の使用で発生する炭酸ガスを減らすシステムを備えた住宅。
4. ガスエンジン方式での発電と同時に、太陽光や風力発電も組み合わせることで、最低限の電力と温水を確保でき、災害時において地域の防災拠点として機能できる「集合住宅」。
5. 雨水を溜めて、濾過し、普段は二次水として使用するだけでなく、メタンガス発酵で処理した後の水も濾過して、普段は二次水として使用し、災害時には、飲料水としても使用できる水の循環システムを備えた「集合住宅」。
6. 最低でも100年は持つ強度を備えた建物にし、その規模は、一人暮らし世帯も含めて50世帯・180人位の人が住める建物を基本にすれば、なんとか100年くらい、初期の目的で維持管理する住民の意志が継承できる「集合住宅」。

こまかいことは、ここでは、省きますが、こんな「集合住宅」を創りたいというのが、当初からの私や遠藤滋氏の構想でした。

集合住宅の建設資金作りのために何をしてきたか

では、そのための資金はどうするのか、というのが次の難題です。障害者にしても、いまの若い世代にしても、住宅建設にかかわる自己資金をどれだけ出せるのかということ、はっきり言って心もとないのが現実です。それでも、こうした住宅建設を可能にするには、住宅建設にかかわる資金を、利息を抑えて貸すシステムがあればいいと考えました。これを実現するシステムとして、いまのところ「財団法人」を考えました。

20年前の当初は、私と遠藤滋氏は、自然とかわれる農場を持ちたいと二人で手に入れた伊豆の甘夏のみかん山を開墾して、農場として誰でも利用できるようにすることで、会員を募って基金を作り集合住宅を作れないかと考えました。そこで、遠藤滋氏の頸椎の変形からくる体調の悪化に見舞われての東京で細々と建物の調査活動（『えんとこ』のホームページを参照）をしりめに、私は、甘夏の産直販売をしながらみかん山に平坦な場所を確保するため、山を削り谷を埋めるという開墾に従事してきました。だが、残念ながら、農場を通じて資金作りをするという思いは初期の段階で頓挫してしまい、私たちはこの21年を集合住宅の建設に関しては具体的に一步も前へ進められませんでした。

いずれにしても、住宅建設に関わる資金は、こうした住宅に住もうとする住民自身が少しでも多く作ることを前提としますが、それには限りがあります。それでも当初は、どんなかたちであれ、こうした住宅建設の建設資金を自分たちで生み出すのは何ができるのかを考えてきました。

そんなさなか、1998年の私の父の死をきっかけに家族のルーツにまつわる記録を調べていましたが、私自身が2000年頃の作業中の転落がもとで腰を傷めて、動き回ることが以前より困難になり、かといって、このまま、何もしないでやり過ごす訳にもいかないし、支え合う集合住宅建設の資金づくりにつながれることが何かないかと思いあぐね、いっそのこと、どうせやるなら日本の記録に残るすべての家族を市販の資料で追いかけて、日本における家族の記録をまとめあげた本を作って資金づくりをしようと思い組んだのが、いわゆる系図の資料。『尊卑分脈』という系図の本に出会って、そこに登場する人物の中に歌人とある人がいて、何々の勅撰和歌集に和歌が載っているという記事。

そこで、もともと国文学を学んだ遠藤滋氏に「どうせなら調べてみようか」と相談すると、「うんうん」と後押しする返事。そんな訳で創世記から1600頃までの人物の経歴と、『万葉集』から『新古今和歌集1205藤原定家他』までの9冊の和歌集の和歌を追いかけてその人の人生や心の琴線（きんせん）に触れて詠んだ歌を折り込んでまとめる作業をこつこつと続けてきました。けれど、いつまでもおちおちできないと、2005年1月から東京中心の生活に戻して、仕上げにかかったのが『日本の家族』という3冊組の本。

また、その間に、伊豆へ出掛けた帰り道、地下鉄工事中の雨の夜道で追突事故を起こしたことから、どんなシステムがあったら事故を起こさないで済んだかを考えて、それを特許として認められたら、うまくいけば、住宅建設の資金作りができると思い立ち、特許申請してみました。けれど、あっけなく特許庁から拒否されてしまいました。だが、既存の技術を使っているが、私のような事故防止を総合的にシステム化したアイデアは、トヨタ自動車であれば、2006年度7000億円の開発費をつぎ込んでいながら、いまだに実現していないのが現実です。

そんな中、2007年3月24日に「朝日新聞・世界発2007」で紹介された次の記事で、ドイツでは国が集合住宅を建設して、支援していることを知ってからは、自己資金や財団方式による資金の調達だけでなく、国や自治体が無利子や低利で建設資金を貸して、こうした集合住宅の建設を支援する政策を実現させる方法もあるのだと思うようになりました。現に文京区では、行政が企業の大規模再開発を支援して、多額の補助金（2007年度、60億円以上）を垂れ流しているのが現実です。同

じ再開発をするなら、住民の住民による住民のための住宅の再開発に資金を使う方が、もっと有意義だと私は思います。

ドイツでの試み

『ドイツに多世代共生住宅』子育て家族と高齢世帯、交流

孤独に悩まず暮らしたいお年寄り、子育てに知恵と手を借りたい若い親たち——日本同様に少子高齢化が進むドイツで、幅広い世代が同じ建物に住んで交流する「多世代共生型」住宅が注目されている。各地で入居待ちの状態で、独政府は今年から増設や運営の支援に乗り出した。孤独死や非行の低年齢化などを背景に、近所付き合いや世代間の連携が見直されているようだ。（ワルトブルク（独南部）＝能登智彦）

「ワイワイと過ごせ幸せ」

森と湖に囲まれた南部のワルトブルク市。人口は約3千人。製紙業と商業の街だ。中心部にある多世代共生型マンション「ユング・ウント・アルト（若者と高齢者）」。

1階奥の共用部屋には日中、住民の姿が絶えることはない。約80平方メートルの部屋に、大きなテーブルやいす、本棚には絵本から哲学書まで備わり、小さなキッチンもある。2月のある夕方、「ボール投げして!」。もうすぐ2歳のザラマリー・シュレーダーちゃんがだれかれなしにせがんでいた。「よーし、やろう」。83歳だというおばあちゃんが笑顔で相手をする。近くで女の子がトイレに立つおじいちゃんに手を差し伸べていた。

ザラマリーちゃんの母親の看護師ベトラさん（40）が自室の掃除を済ませ、コーヒーを手に「私も休憩」と談笑に加わった。ベトラさん母娘は2人暮らし。気軽な近所付き合いができると聞いて応募し、半年待って昨春、入居した。以前は娘から目が離せず仕事を休みがちだったという。

「おばあちゃんが娘の世話をし、子育ての相談にも乗ってくれる。私はみんなの買い物などを引き受けている」と話す。

●世話役常駐

このマンションは3階建て。42～77平方メートルの36戸に計44人が暮らしている。年齢構成は0～17歳が8人、18歳～39歳6人、40～59歳5人、60～79歳10人、80歳以上15人。一世帯あたり1・2人は独平均の2・1人を下回るが、マンションなど賃貸住宅では一般的。家賃も最高で約500ユーロ（約7万9千円）と平均的だ。

社会福祉やコミュニケーションについて学んだ「マネジャー」と呼ばれる世話役がほぼ常駐。生活相談に乗ったり、住民の特技や趣味を生かした英会話講座や料理教室、ハイキングなどの開催を仲介したりして、住民の交流を手助ける。

住民同士の助け合いでは、もっぱら支援する側に回る人に不満がたまりがち。物音の苦情やそりが合わないといった訴えは、どこも同じだ。尾を引かないよう、マネジャーが不満や苦情を伝える役をすることもある。

マネジャーのクリスタ・ベレ・レプヘルツさん（58）は「良好な近所付き合いが岳モノ全体に安心感をもたらしている。率直に注意しあうぐらいが最良の関係だ」と話す。

一人暮らしが長いドリス・ラオフアイゼンさん（66）は「老人ホームの方が便利だろうが、ワイワイと過ごせて幸せ。子どもや犬の世話を頼まれればうれしい」と話す。

●孤独を解消

「ユング・ウント・アルト」は15年前、ワルトブルク市の福祉モデル事業として始まった。きっかけは少子高齢化が進むことへの危機感だった。

高齢者らへのアンケートで「普通の生活を続けたい」「社会とつながってほしい」「独居が不安

」といった声が多かった。しかも、高齢者の大半が元気だった。食事や医療サービスを完備した「介護型」ではなく、高齢者の「孤独解消」や「元気づけ」を最優先する多世代共生型をめざした。

現在、このマンションを運営するのは、バーデンビュルデンベルク、バイエルン2州とワルトブルク市など両州にある19市が資金や土地を提供する福祉財団「ザンクト・アンナ・ヒルフェ」。多世代共生型住宅19カ所のほか、老人ホームや老人向け介護施設、障害者施設などを運営している。

入居者の選考は財団のスタッフとマネジャーが行う。一人暮らしかどうかや、子どもの数などを考慮し、マンション全体の年齢構成に気を配る。

全国に200カ所、国が補助

家庭省などによると、多世代共生型住宅は約20年前、地方自治体が支援する福祉財団や公益法人などが運営の中心となって登場した。現在全国に約200カ所ある。世話役を置いて比較的組織だった運営をする50人前後のマンションや、既存のマンションに共用部屋や集会施設などを後に設けたものなど様々だ。入居希望が増え、1年以上待つ例も少なくないという。

メルケル首相は今年、多世代共生型住宅の取組に国レベルの支援策を打ち出した。1カ所につき、共用部屋の家具、パソコン、書物などの購費やイベント費用として年間最高4万ユーロ（約630万円）を補助する。共用部屋の新設・増設も奨励。家庭省に専門の担当官を配置して情報提供や相談に応じる。2010年までに総額8800万ユーロ（約140億円）を投じ、400カ所以上に倍増させるのが目標だ。

一人暮らしが3人に1人という65歳以上の高齢者の孤独を癒やす一方、高齢者が子どもの世話をしたり、知識や経験を若い世代に伝えたり、その相談に乗ったりする環境をつくり、世代間の協力を促すのが狙い。それが孤独死を防いだり少年非行の拡大をくい止めたりする効果にもつながればと、家庭省は期待する。

福祉問題に詳しいメルキッシュ・アルゲマイネ紙記者のユリアヌ・フェルシュさんは「多世代共生型住宅は、世代間の相互理解を進める一つの試みだ。しかし『疑似家族』なので、互いの距離の取り方が難しい。軌道に乗せるには試行錯誤が必要だ」と指摘する。（以上朝日新聞の記事）

日本でも

私と遠藤滋氏は、「ケアを前提に暮らし合う集合住宅」をまずは1つ、できれば東京の文京区と世田谷区に一棟づつ創ることを考えてきました。しかし、新たな構想の「支え合う集合住宅」は、ドイツの例とは異なりますが、災害に見舞われた時の防災拠点としてその地域で機能を果たせる分や生ごみの処理費用の軽減、地球温暖化対策住宅という観点からしても、また現在住宅に困っている高齢者や障害者と共に若い世代を支える政策としても最適なプランです。したがって、ドイツの例にならって、大いに自治体や国がバックアップする根拠があるというものです。

だから、東京でというだけでなく、それぞれの地域で「支え合う集合住宅を創る会」を立ち上げて、その地域の自治体や国に、こうした「支え合う集合住宅」の建設資金のうち、足りない分を無利子ないし低利で貸すことを政策として実現させて、その地域からどんどん「支え合う集合住宅」を建設していくことが可能になると考えるようになりました。また、たとえ低利であっても貸す資金である限り、40年、50年と年数をかけて返すことになっても、自治体にとっては戻ってくる資金なので、税金の無駄づかいにはなりません。

現在のところ「支え合う集合住宅を創る会」は、まずは東京に創ることを前提に考えています。でも、私たちの提起した内容にどんどんアイデアを肉付けして、同様の集合住宅を創りたいと希望する人が「支え合う集合住宅を創る会」を地域ごとに立ち上げて、地方自治体や国会議員にも働きかけ、足りない資金を捻出させて、日本を、日本のあちこちに「支え合う集合住宅」を建設する国

にしようではありませんか。

そして、各地の「支え合う集合住宅を創る会」が、それぞれの地域で、障害者・高齢者・子育て世代への支援策として、また、温暖化対策を備え、災害時の防災拠点となる「集合住宅」作りを支援し、補助する政策を、企業の再開発を支援して補助金をばらまく政策のかわりに実現するよう働きかけようではありませんか。

この趣旨に賛同していただける方、あなたも私たちと行動を共にして、「あなたならどんな集合住宅を創りたいか」アイデアを出し合い、いっしょに自己資金としての建設資金作りや財団としての建設基金作りをしながら、自治体に政策変更をせまり、東京でというだけでなく、それぞれの地域で「支え合う集合住宅」を建設するための行動を起こしませんか。

支え合う集合住宅と集合住宅株式会社の運営案

障害者や介助を必要とする高齢者などの居住枠を一定の割合で確保する。

この住宅の居住者は、生活上の諸々の作業に関して、できない人に対しては、できる人が相応の負担をして、無償・有償を問わず行う。

ずいぶん前に、名古屋の公団住宅で、家賃未納で退去を求められた老夫婦が自殺する事件があったが、理由があって、分担金（家賃や諸経費）を払えなくなった時は、その経済状態に応じて援助し、追い出すようなことはしない。

有料老人ホーム方式はとらない。居住権としての株は、この住宅の居住者として、生活上の諸々の作業に関して、できない人に対しては、できる人が相応の負担をして、無償・有償を問わず行う限り、家族が引き継ぐことができる。但し、それまでは自分勝手に生活していて、いざ自分が困った時に助けてくれという家族に関しては、入居を認めるかどうかの扱いを保留する権利を、住宅株式会社は有する。

完全な賃貸方式もとらない。学生が将来に渡って共に生活することを希望したり、新たな土地に集合住宅を建てようとしていく原動力になる時には、同じ株主としての権利を与える。

株主になれない居住者（生活保護世帯や学生など）も、管理・運営に関して同等の権利と義務を負い、すべての居住者が対等な立場で、建物を管理・維持する。

収入に応じて相応の家賃分を負担する。

株式会社が管理する範囲と居住者組合として運営する範囲を明確に分ける。例えば、借金の返済など財産に関する管理と事業の運営を株式会社で行い、食堂の運営や電気・水道・ガスの経費や修理費の管理などを居住者組合が行う。

株式会社とする場合は、株は家族が引き継ぐ以外は第三者の他人に譲渡できない。

株式会社の情報はすべて居住者に公開する。嘘の報告や誤魔化しはしない。

「支え合う集合住宅」を創る構想に賛同していただける方へ

私たち（遠藤滋氏と私）が「支え合う集合住宅を創ろう」と、構想し、それを実現するために模索を重ねた時、例え中途半端に、何も出来ずに終わってもその結果がどうなっていくと、自分たちで引き受ければそれでいいと決意して歩みだしました。

この「支え合う集合住宅創り」は、私たちが誰かに頼まれて始めたのでも、互いに「あれやれ、これやれ」と言い合ってやってきたのでもありません。ただ自分の意志で、自分たちがいま何をやるか、また何をやれるか、何をやる必要があるか、その時々二人で話し合い、考えながら一歩一

歩やってきたことです。だからこの構想に賛同し、これから仲間として共に「支え合う集合住宅」創りに参加してくれる人に対しても、個々の課題では、誰に対しても、「あれをやってくれ、これをやってくれ」と求めることは、私たちの流儀に反することなので、たぶんしないと思います。

では、どうしてほしいのかというと、まずは「支え合う集合住宅」創りに向けて、自分が何ができるか、何をやりたいか、あなた自身が自分の課題を明確にして、取り組むことを望んでいます。そして、このことを、私たちとは別個のところでやりたければ、私たちと連絡を取らずにやればいいし、私たちと全面的に協力しあってやろうという人は、私たちと連絡を取り合ってやってください。

その過程で集合住宅の建設に向けては、設計も含めて解決すべき課題は全体に渡っているのです、それぞれ自分の得意分野や自分が取り組みたい分野ごとに分担して、解決していきましょう。そうして得られた知識や解決方法を全体で共有して、それぞれの地域の実情にあった最高の「支え合う集合住宅」を創っていきようではありませんか。

なお現在の私たちが、自分たちに課している課題は、「支え合う集合住宅」の構想をまずは知ってもらうために、出会う人ごとに機会があれば話をし、簡単なメッセージ文を読んでもらったりして、このホームページを見てもらうこと。そして、この構想をある程度は理解してもらった上で、その人が、自分も「支え合う集合住宅創りをしよう」と思ってくれたら、次に、この「支え合う集合住宅」の構想を自分の周りで広めてくれることを望んでいます。その中から、全国的にも地域的にも、「支え合う集合住宅」創りをしようという仲間づくりをすることです。この過程で、仕事を分担して会としての体裁を整えていきたいと考えています。

まずは文京区でも、またあなたの地域でも『支え合う集合住宅』のモデルケースを創るべく、一人一人が行動を興しませんか。当面は次のホームページも活用していただき、あなたの知恵も結集してもらい、構想の内容ももっと豊かにしていきましょう。

『支え合う集合住宅』のホームページのアドレスは

<http://www1.tcn-catv.ne.jp/sasaeai>

この企画書は、去年（2007年）一年間かけて、ホームページに書き加えた個々の文章を元に作成しました。

頒 価 送料込 400円

2冊目から1冊 300円

郵便振替 00190-8-752524

ケア生活くらぶ

銀行口座 店番号559-1071078

支え合う集合住宅建設基金

ゴミ処理の現状を知るためのマークシート

都・道・府・県

市・区の場合

人口 人 平成 () 年度のゴミ処理量と処理費用

全ゴミ量	トン (資源ゴミ・焼却不能ごみも含む)
この内、可燃ゴミ	トン
プラスチック類	トン
内生ゴミ	トン (プラスチック類収集時に含まれた分も追加)
収集費用	億 万 円
焼却費用の負担金	億 万 円
内焼却電気代約	kwh で 万 円
内焼却ガス代約	m ³ で 万 円
合計	億 万 円

	収集費用	焼却費用	合計	炭酸ガス
全ゴミ量 t	円	円	万円	t
プラスチック類	円	円	円	t
1 t 当	円	円	円	円
内生ゴミ t	円	円	円	t
1 t 当	円	円	円	円

※全ゴミ収集費用円÷全ゴミ量トン×生ゴミ量トン=生ゴミ収集費用円で算出

一人当年間焼却ゴミ	収集費	焼却費	炭酸ガス	1 kg当
全ゴミ kg	円	円	kg	円
生ゴミ kg	円	円	kg	円
6000人当年間焼却ゴミ	収集費	焼却費	炭酸ガス	1 kg当
全ゴミ トン	円	円	kg	円
生ゴミ トン	円	円	kg	円